

議事要旨

改革推進会議施策点検部会（産業振興部会）

日 時 平成22年8月26日（木）

13:30～16:19

場 所 島根県職員会館 2階 多目的ホール

○座長 ただいまより改革推進会議施策点検部会の本日最終日、産業振興部会を開催させていただきます。

各委員様におかれましては、お忙しい中、またお暑い中、本日御出席いただきましてまことにありがとうございます。

本日の会議では、委員さん皆様方から具体的な御意見、御提言をお聞きしたいと思えます。積極的に御発言をいただきますようお願い申し上げます。

では、まず最初のテーマ、商工労働部の方の1つ目のテーマですけれども、観光関係ですね、「神話等の歴史・文化をテーマとした観光誘客の展開」について、順次こちらから委員さんの方を指名させていただきますので、お一人ずつ御発言いただければと思います。

○委員 「神話等の歴史・文化をテーマとした観光誘客の展開」というのが、宿題というか、テーマだと思いますが、前回配られた資料を見て、全体的なおんぼらとしたイメージというのはわかるような気がします。ただ、現段階で目玉の事業だとか観光の誘客の目標数、それからターゲットエリアなどのデータがないために、具体的な観光誘客の展開という宿題をクリアすることはなかなか難しいというふうに思います。ただ、神話の国島根のイメージアップ作戦を展開するという意気込みというのは伝わったような気がします。

その中で一番大切なのは、まず県民理解。県民がいっぱい資産や歴史を抱えてるわけですが、誇りの持てる郷土づくり、島根県づくり、これが一番大切なことだと思うので、県民にどうやったら周知できるのか、どうやったら県民が誇りに思って生活できるのか。例えば出雲のたたらなんかも、ヤマタノオロチとたたらというテーマで「古事記」もつながりがあります。ですから、そういう機会に勉強する機会や、小・中学校との連携や東西連携、出雲と石見の連携等を絡めながら県民理解の醸成を図るべきだというふうに思います。それが大きな一つ。それから、もちろん県外への広報、島根県への誘客いうことをダブルスタンダードという形で考えたらいかがだろうかと思います。以上です。

○委員 私の意見は、このテーマに掲げられている神話等の歴史・文化をテーマにということについては特段意見はありません。もっと広く、この島根の観光業ということで意見

を言わせていただきたいということです。

どういうイベントをされても、やはり観光客を誘致するということは、一たん島根に来てくれた人が、また来たいと思うようになってもらうことがやはり重要なんですよね。何かイベントを掲げてそのときやってきた、後もう来ないというじゃあやっぱりだめなわけで、何回も来たいと思っていただけるようにすると。

そのときに考えるに、私はやはり島根のアクセスというのが非常によくはないというふうに思います。飛行機を使う方というのはいいんですけども、特に西日本から来る方というのは恐らくJR使われると思うんですね。伯備線に乗って岡山から来て、すごいしんどい思いして来て、また帰りもしんどい思いして帰って、また来たいと思うんでしょうか。

私は過去に何回か県の方にも申し上げたことがあるんですけど、何とかあの伯備線を、あんなカーブをやめて真っすぐ直線化するだとか、それから特急が速度落とさなくてもいいようにポイントを改良するだとか、そういうことにお金使うことできないのということは何回か申し上げたことあるんですけども、皆さん御存じかどうかわかりませんが、岡山と米子の時間と岡山と鳥取の時間ってどっちが短いと思いますか。岡山ー鳥取の方が短いんですよ、2時間かからないんですよ。それは智頭急行でああいう鉄道が走ってるからでして、伯備線も、やはり乗ってこられた方がもうそんなしんどい思いしなくて来れるように、決して短い時間じゃなくてもいいんですけども、ゆったりとした気持ちで来れるように、そういうふうな改善ができないのかとつくづく思います。

それは観光に限らずビジネスで来られる方も一緒です。ビジネスでこっち来られるときに岡山からグリーン車に乗ってきて、仕事しようと思ったけども仕事なんかできないよって言われるんですよ。それぐらい乗り心地悪いわけですよ。それはJRの問題だって言われたらそれまでかもしれないけども、JRだってやっぱり採算性の問題があるんだから、そこは県が予算をつぎ込んで、伯備線、それから山陰線もそうですけど、もっと乗り心地のよいような形で鉄道網を整備できないのかと。そうすると、じゃあまた来ようかという、そういう思いをされる方も多いんじゃないかというふうに思います。

それから、ちょっと長くなって申しわけないです。もう一つは、これはきのうたまたまある経営者と話してる中で伺ったんですけども、観光に出雲地方に来られて、観光地間の交通が非常に悪いっていうんですね。バス、公共交通機関で回るってのはとんでもない話で、タクシー乗らないといけない。最近若い方で節約志向の方は多いと思いますけども、そういう方がタクシーに乗って回れるのって話になる。やはり観光地間の交通網というこ

とをもう少し考えてもらいたい。

それから、これもその経営者の方がおっしゃいました。観光客を迎える側の気持ち、きょう白石家さんもいらっしゃるんですけど、恐らく旅館の方々とか、そういうところは対応を非常にうまくやっているとっておるんですけども、車で来られた方の駐車場の対応はどうだとか、それからお土産物屋さんの販売員の対応がどうだとか、そういうことが、これ多分アンケートの中にもクレームの中にあっただと思うんですけど、そういう一つ一つがちょっと改善されないと、また来たいなっていう、そういう気持ちにならないと思うんですね。そのあたりを、ちょっと広い意味で観光のためにということで提言をしたいというふうに思います。

○委員 私の方の意見はいろいろちょっと多岐にわたっておりまして、まず、私が島根県のことをよく知らないというところで、文化、歴史に絡む、個人が勉強せなあかんような、来られるお客様に対して歴史であるとか文化であるとかを説明できるようなガイドブックを県民へ向けて配っていただいて、県民がこぞって集客できるような知識を持ちたい。仕事上で来られたお客様に、今回は仕事で来られてるけども、次はこういう歴史的文化的のここを見に一遍プライベートで来てくださいと言えるようなネタをたくさんいただきたいというのが一つ。

それと、今、委員さんおっしゃってました、来ていただくときのルート、これも、もう私いろんな会議で、乗り心地までは言うてないんですけど、飛行機とJRの時間だけ合わせてくれというような、そういうところへの連絡がうまく行って待ち時間の少ない状態で他県から来ていただけるような配慮、アドバイス、こういったところへ行政がかかわってほしいということと、先ほどの歴史・文化をわかったときに、その県内の歴史的なポイントをどうめぐるかですね、この辺のルートの説明までできるガイドブックにしてほしいんです。今回は石見でイルカと銀山見てください、次は出雲で松江の観光と足立美術館へ行ってくださいというような、地域を連絡するときの、こういうルートで行ってくださいねと言えるようなところまでの県内移動のガイドブックもいただきたいなど。これも私が島根県をよく知らない勉強不足のところを言うてるようになってしまいうんですけども、そういったところを教えていただいて、県民がほかの地域の方々に島根県のよさを売れるガイドブックが欲しいなど。

これは何やねんいいましたら、私が趣味の世界でいろんな地域へ行ったときに、その仲間が情報を振ってくださって、3回同じところへ行ったことがあるんです、過去に。1回

目は自分の趣味のイベントで行くんですけど、2回目、3回目は、そのときに行って聞いた情報で家内と子供連れていこかということになるんですね、これ。その地域のたまたまその友達が市役所の職員の方やったということもあるのかもわからないのですが、やっぱりいいところをたくさんアピールされて、僕が聞いたことについて、また訪れてまた違うよさを味わったという経験をしておりますので、そういったところの充実を図っていただけたらと思います。

○委員 何となく現在すごく殺伐とした時代なので、何かみんながいやしを求めているのがすごく伝わってくるんですね。そういう中で、この今回の島根県の神話とか歴史、パワースポットをめぐるというような観光地の誘客というのは、今の時代にはとっても私は合っていると思います。ですからそれをもっとPRして行ってこれを膨らませていっていただきたいんですが、どうしても何か取り上げ方としてかたいようなイメージがあって、歴史はもちろん大事なんですけども、それがかたいところばかり行くと気軽な気持ちで来れないという部分があるので、もっとやわらかく取り上げていただくといいなと思います。雑誌とかでも、もう少し若い人、女性向けの雑誌に取り上げてもらうとか、そういった感じで、歴史を見るのはもちろんですけども、例えばちょっと年配の御夫婦のときとかに、縁結びの神様なんだけど今度はお礼参りの旅はどうですかみたいな感じで、もう少しそんな砕けた感じで持っていくことも必要なんじゃないかなと思います。

先ほどの皆様の御意見とちょっとダブってしまうんですが、島根県民にとって島根の魅力を知ってるということがすごくやっぱり不足してるように思いまして、先日、高校の先生方とちょっとお話する機会がありまして、笑い話で出たんですけども、島根県の高校を卒業して県外に大学行ったり就職された方に、ほかの他県の方が島根のいいところは何って聞かれたときに、答えたのが、田舎、じゃあ見るとこ何、サティって答えたそうなんです。聞いて、笑い話だったんですけどすごく残念だなって思って、じゃあ島根を出ていった人たちっていうのは島根のいいところを知ってるのかっていうのが、すごくやっぱり大事なことなんじゃないかと思いますね。お金をかけてPRすることも大事だけど、島根に住んでて生活してた人が知らないってことはやっぱり恥ずかしいことだと思うので、そのあたり、ぜひ教育関係の方とも連携して、島根をもっとみんなに知ってもらうということを大事にしていきたいなと思います。

○委員 先日の第1回目の会議が終わりましてから帰って二、三日たったごろに、朝御飯をつくりながらテレビを入れて、テレビを聞きながら朝御飯をつくっておりましたら、あ

る番組で、その前段はちょっと聞き漏らしたんですけれども、そんな聞かれるのは島根がどこにあるかと聞かれるぐらい難しいという司会者の声が入りましたですね。それはもちろん東京から放映をされてるんですけれども、その質問が何だったのかっていうのは聞き漏らしたんですけれども、そんなふうな質問をされるのは島根県がどこにあるかと聞かれるぐらい難しい問いなんだということを言われました。そのぐらい島根と鳥取というのは知名度がないんですね。関西も関東にとっても、島根ですと言うと、ああ、砂丘があるところですかとかね、いろんな言い方をされますけれども、そういう島根にとって、この計画は非常ハードルが高い計画だなと実は思いました。

このハードルをいかに低くしていくのかということが一つ問題になろうかなと思うんですけれども、それは、これまで島根に来られた方をリピーターとして招くという手法だろうなと思います。島根がどこにあるのかわからない人に神々のまちへおいでなさいなんてパンフレットを渡しても、何だこりゃっていう感じで、なんだったらもっと楽しいところに行った方がいいと言われるかもしれない。非常にアカデミックな人は違うかもしれませんが、それでなければちょっと観光地としては選ばないだろうと私は思います、客観的に見て。

それならば、これまで島根に訪れていただいて大なり小なり島根がよかったなと思っていただけのような方に、再び来ていただきたいという情報発信をすべきだろうと思います。そういう情報発信ができるのは旅館業の方だけです。私も全国をいろいろ旅行いたしますけれども、いろんなところの民宿も含めて年に一回必ずお便りが来ます。ことしはこんなことやりますからぜひ来てくださいという情報を含めて参ります。ホームページを開くのもいいでしょう、テレビでやるのもいいでしょう。鳥取みたいに、吉本新喜劇で何かイベントをされるそうですけれども、そういうのもいいかもしれませんが、そういうきめの細かい、これまでおいでいただいた方に対してラブコールを出していくという、非常に地味かもしれないけれども、長く時間がかかるかもしれないけれども、そういうことの積み上げがハードルを低くすることにつながっていくんだだろうと思います。

そういうことからすると、このアクションプランの事業のワーキング会議ちゅうのは、まず役に立たんじやろうなと私は思いました。ワーキング会議にはもっともっとワークする人を入れるべきです。仕事をする人、情報を持ってる人、第一線で島根を訪れた人と接する機会を持ってる人、そういう人たちをワーキング会議に入れていかなければ、この事業は前には進んでいかない。一発花火で打ち上げられるかもしれませんが、それで

終わりだろうなと思います。そういうふうなことをやってこそ初めて、この事業が終わった後も島根の観光へつながっていけるような、日常的な観光事業として根づいていく大事な根っこだろうなと私は思いました。以上です。

○委員 観光誘客において、今、神話とか歴史・文化がテーマとなっておりますが、なかなか私も、これはそういったものでは、ちょっと自分の方からこういうことを言ったら大変あれなんですけど、神話とか歴史とか文化ではなかなか人集めが難しい現状です。萩だとか隣にありますけど、そこでも吉田松陰とか高杉晋作とかいってもだれも来ません。私は前県知事さんのときに、大阪に島根のいろんな商品を用意しまして、海産物、農産物を用意しまして、それで大阪の大きいデパートで神楽を舞いながら売りに行ったことがあります。そのときはすっごく好評で、島根もどこにあるかということも知っていただきました。先ほど他の委員さんもおっしゃいましたが、島根だとか山梨とかいうのは日本のどこにあるかわかっておられない方がほとんどなんです。九州にあるか四国にあるか、島根なんて本当知られない方がたくさんおられます。

まず知ってもらって、私、西部に住んでるんですが、もう山の奥の奥に匹見町というところがあります。ここはほんの過疎化で、もうおじいちゃんおばあちゃんばかりしかおられません。私きのうそこに、ちょっと人手が足りないということでボランティアでブルーベリーを摘みに行ってきました。このブルーベリーを加工してジャムとかにされるんですが、そのブルーベリー摘みで募集されましたら、広島の方から一番多いときには71人来られたそうです。本当の田舎ですよ。すごくいいところなんですけど、一度皆さん、匹見町に行ってみてください。その前はツツジ祭りのころだったんですけど、やはりワサビだとか、匹見町の特産物はワサビですので、そのワサビをとるといって、その体験をしていただいたんです。そのときも、広島に近いですから広島の方からたくさん来ていただいて、やはり石見神楽を見ていただきました。お弁当も手づくりの、農家の方がほんの野菜とかそういったものを入れてお弁当を出していただいたんですけど、すごく喜んで帰っていただきました。

逆にとりまして、島根県も自然とかそういった人とかが本当に素朴な方でして、いいところがたくさんあるんですけど、なかなかかわかってもらえない状況なんです。だから私は、少しずつ島根全体でそういったことを進めながら、また島根に行ってみよう、そういった方を一人でも多くつくるのが大切じゃないかと思っています。

今、観光の方、あっちこっちに出かけてるんですが、特に中国の方だとか韓国の方が、

九州あたりももうほとんどです。70%から80%、別府の温泉あたりも大体80%ぐらいが中国の方だと言っておられました。私は、ここ島根県もすごく中国、韓国に近いですね、ですからもう日本だけではなくて、そういった方の呼び込みも含めて島根のよさをいろんなことを知恵を絞って皆さんと一緒に考えて、少しずつでも売り出したらと思っています。以上です。

○委員 私、実は東京育ちでして、温泉津で今温泉の外湯を経営しております。6年たっております。本当に毎日毎日一人ずつのお客様を大事に、要は、温泉津がよかった、薬師湯がよかったということでお客様ができれば薬師湯に戻ってきていただくことはありがたいことなんです、私の願いとしては、地域の旅館に1泊はしていただくために御家族かお友達とゆっくりしていただくための一つのステップになったらいいと思って、毎日本当にスタッフに観光協会以上のおもてなしの気持ちでお迎えするようにしてちょうど6年たっております。

その間にいろいろな経験をしたんですが、東京に、時々私も勉強だとか、それからいろんなことで出ます。偶然だったんですが、島根県が全車両、ぶら下がり、つり下がりとか、あの車両を何回か見たことがあります。確かにお金かかっている。以前はああいうタイプの広告って多かったと思うんですね。最近はこういう経済状態なので、ああいう広告していると、この県大丈夫だろうかとか、この会社大丈夫だろうか、これ商品の価格に回っているだろうかという感じで私は見るんですね。だからちょっと、あの全車両、山手線を、確かに私、回答いただいたんですが、山手線は1両当たり通常時間で100から200名、ラッシュどきで500名が乗車して乗客にPRできてるっていうんですが、私、500人というのは、多分私が中学、高校、確かにかばん放してもぽっと落ちなかったあのときの状態で、今、山手線が500人乗ってるとはとっても思えないんですね。二、三分に1本走って、かつ皆さん会社が時差出勤をしてる状態で、あの状態で、確かに広告はあると思うんですが、ああいうお金を使うんだったら、確かにJRもキャンペーンでいろいろなパッケージだと思うので比較的安くされてると思うんですが、隠岐が前回100万円出した、多分あの印刷代の100万円だったんだと思うんですが、そういうことも考えると、やっぱり今の時代に合った宣伝をした方がいいというのが1点と、それから、どうしてもやっぱりいろいろ関係者の方来られても、ここに書いてあるんですが、観光協会、それから行政の方、いろんな方がやっぱり把握し切れてない。

それから、私は温泉津という本当に小さな地域ですので、もう来られても、私どもは本

当に事前にJ R、それから観光旅行会社がキャンペーンで来られることすら知らされてないんですね。どやどやって二、三十人、もっと多いかもしれないんですが、施設にばあつと入ってこられて、あららららっていうと、見に来てやってるんだから、おまえ何をそんなに入り口でもたもたしてるんだってイメージなんですね。私どもは、たかが300円、350円のビジネスなんですが、お金は入って、裸で入っておられる浴室に背広の方が、いかに県が招かれた、観光協会が招かれたキャンペーンの方たちでも、裸の方たちに背広着た人たちがどうぞっていうふうな形でお入れすることはできない。でも事前におっしゃっておいていただけたら、この時間帯はお客様に御遠慮いただくとか、ちょっと上でお待ちいただくとかいう方法もとれるのになって、せっかくの好機が逃れるなということで非常に残念に思うことはありました。

ですから、お金の使い方と、それから地元の方たち、それから県の方たち、観光協会の方、やっぱり勉強してほしいと思うんですね。それで、私も現場にいる人間として、お客様、それからテレビ局もよくお迎えするんですが、現地の方に観光協会の方に案内してもらったりすると、自分たち興味のないとこ案内するって言われるんですね。私も東京育ちなんで、島根のあっちこっち見ると、ここいいなって、もう本当に川のわきで咲いてるお花もいいと思うことあるんですね。だからよくAからBに移るときに、地元の方はAとBを紹介したいんですが、テレビ局でもお客様でも、AからBに移るところのまちの景色だとか自然の景色、そういう様子にすごく心を打たれたりしてほっとされることが多い。その辺のやっぱり人情、気持ちを理解されると、これからいやし、健康の時代なのですごくいいかなと思ってます。

それと、今、正しく情報を発信するとかいうことがあるんですが、私どもの施設も本当にたかがすごく小さいんですが、やっぱり正しい情報を発信してもらえないんですね。私、5センチ角の情報発信でも必ず見ます。時々3時でも4時でもなって、写真1枚、二、三十文字でも必ず一生懸命訂正したり修正したりして先方をお願いして出すんですが、そういうときに、ひどいときには、これは県庁からもらった、これは行政から、観光協会からもらったってキャッチボールされます。実際J Rでもあったんですが、そういうことがないように、やっぱりできたら当事者に確認するようなチャンスがあってもいいかなって。それで、そういうのが一つになったときに、やっぱり島根って本当に宝物の県なので、いぐあいになるかなと思ってます。

それから、山陰高速道路なんですが、私もつながってほしいと思ってます。でも、皆さ

んがおっしゃってるみたいに本当におもてなしの気持ちがなければ、よその他府県で起きてるように、高速道路がつながったためにもう通過でしかなくなる、便利がよくなるとそのまま行ってしまう。だから便利がよくなって自分たちのところにおりてきてもらって、できるならば数時間、1泊してもらえるようなおもてなしの気持ちと体制が整うようなのを決起大会のときに、意志、それから気持ちを高揚するような情報伝達っていうか、教育っていうか、そういうものを一緒に流していかれると、よりよい観光県になるんじゃないかなと思っております。以上です。

○委員 今、各委員さんからいろいろとお話がありました。この面とやや重複する面があるかもしれませんが、その点はひとつお許しいただきたいと思います。

私も、他の委員さんと同じように東京に10年ほどおったことがありますし、また観光協会に勤務をしておったこともございまして、業者の皆様とかいろいろな方とつながりも、また業者の皆さんの考え方等々も大体わかってるつもりでございます。

それで、私が一応今思っておりますのは、神話等の歴史・文化のふるさとという島根、テーマでございますけど、これは大変すばらしいテーマだなと思っております。といいますのは、島根県の場合には、隠岐を初めといたしまして、安来から始まり松江、そして出雲、西部の津和野まで、あらゆる歴史・文化がもう軒並みにびっしりと詰まってるようなところだなと思っておりますし、そこへもって日本海に面しておりますし、また逆に反対側は農林業につながっておりますので、食の面でも大変豊富な面がある。そして歴史・文化の面でもたくさんいろいろな資源があると。

にもかかわらず、先ほどどなたかが言われましたけど、認知度は大変少ないということ。これ、以前に、県の皆様は御存じだと思いますけど、澄田知事さんのときだなかったかと思えます。銀座で調査を、島根県のアンケートか何かをとられたら、100名中8人しか島根県ということを知らなかったということが新聞に一回出たことがあります。そのくらい、これだけの資源があるのに、なぜ島根県ちゅうのがこんなに認知度が少ないのかなと大変不思議に思っておるところでございます。

それで、私が今回申し上げたいのは、私が観光協会におるときに、大型クルーズ、飛鳥ですね、これは400人から500名ぐらいを一回に積んでくるわけですけど、先般たしか浜田か、あそこにも着いたことがあるんじゃないかなと思います。それで今回、国も施策として浜田港が重要港湾に指定をされたわけでございますので、こういう機会をとらえて、やはり現在は従来と違ってやや個人的な観光客、また市民のグループとか、そういう

観光客が多くはなっておりますけど、県全体の観光客をふやすにはこういう大きな団体を誘致することが大事だと思っておりますので、やはりああいう大きな船を誘致すると。そうすれば四、五百人は乗ってきますし、お客様の内容が、定年退職をされた方とか、それから結構裕福な方たちが多く乗っておられますので、大変落とす金も多いもんがあります。

ただ、島根県の残念なところは、大変長いということ。石見から始まって安来まで長い、余りにも長過ぎる。そのために、こういう大きな船で来た場合に県を一日で回るちゅうようなことはできません。そのために石見なら石見だけを見て、朝接岸したら石見を見て、それで夕方出港するというような例があるんじゃないかなと思いますので、そこらは業者とひとつ協議をされて浜田港に入港させて、石見銀山は全国の遺産に登録をされて、また先般、今の指定した面積では狭過ぎると、もうちょっと広げたらどうだということまで言われておるような大変貴重な資源でもありますし、その先には津和野というところもありますので、そこらを十分見ながら、今度はバスで、やっぱし400、500人になりますと10台ぐらいのバスになりますので、そこらを上手に使いながら途中9号線を通って、どこでお泊まりになるかは、それはそのコースの中で決められて、それから出雲、それから松江、安来というように回ってもらおうと。そうして船の方と交渉をされて、飛鳥なんかは最初に入港のときは浜田へすると。しかし、出港するのは今度は境港から翌日出港してもらおうと。そうすれば1泊は県内でしてもらえenと思いますので、そういうような交渉も、これは私も観光協会に関係しておりますときに日本郵船とか東海汽船にも何度か行きました。そしていろいろと協議をすれば、もちろん向こうも石見銀山なんかには相当興味を持っておると思いますので、実現をするんだないかなと思います。

それから、ちょっとそれとは別になりますけど、やっぱし、どなたか言われたですけど、ちょっとPRの仕方が地味だないかなと。神々に余りにも頼り過ぎて、マスコットなんかにしても、県外でいろいろなイベントを行います。そういうときに配る小さなマスコットにしても、鬼太郎のようなおもしろみがない。神々のような地味なマスコットを配ったり、また縫いぐるみにしても、みことちゃんですかいね、ああいうような神に確かにつながるような、ああいう地味なちょっと宣伝だなということでございますので、やっぱしせっかく出雲大社とか八重垣とかいう有名な神社があるわけですから、スタンプラリーというようなものもひとつやってみたらなど。そしてどんどん回っていただいて、何カ所か回ったら出雲大社のお守りを無償で最後には差し上げるとかすりゃいいと思います。

ちょっと長くなりますけど、それからもう1点は、現在、婚活という言葉がよく流行語

のようになっておりました、これは農業関係では、最近よくあっちこっちで農業に興味を持っておられる若い男女を集めて、結構これがいい方向に向かっているような例もございます。そういう面からいえば、この出雲大社にしても八重垣神社にしても、これは縁結びの神として有名でございますので、これらを一つの材料にして旅行業者にお願いをして、婚活ツアーと申しますか、それはどうでもいいですけど、そういうツアーをつくって誘致するというようなことも必要じゃないかなと思っております。

それから、先ほど道路の問題が出ました。確かに大変県が長いために回りにくいんですね、そういう面で宿泊も少ないというような状況じゃないかと思っておりますので、そういう面からいえば、やはり国道9号の整備とか、それから54号線ですか、それとか314号線、今一部やりかけておるようですけど、これらを早急に整備をして中国縦貫道からすぐに9号線につながるようにしていくと。そういうことにしないと、余りにも途中のロス時間が多いとどげしても業者の方もコースが組みにくくなりますので、これらの道路の整備もぜひやっていただきたいなと思っております。

それともう1点、最後ですけど、先ほどどなたか申されたですけど、大変な大きな企画をしておられるわけですけど、実際にこういうのは、もう各地、県民挙げて取り組まなければならないと思っておりますけど、こういう企画をされても、ほとんど集まって説明会を聞くのは町村長さんとか、また観光協会の長の方たちであって、実際に仕事をしておる人たちにはあんまりよくわかってないという面が多いように思います。そういう面では、やはり県の観光の担当者の方もお忙しいとは思いますが、やはり各市町村に出向いて、そういう町村長さん等の説明会は県でされるにしても、地元の直接の旅業の皆さんとか、それからタクシーとか土産屋さんとか、いろいろな直接業務に携わるような人たちを地元で集めて、今回こういう企画のテーマで事業を行うのだということを徹底してひとつ指導をしていただく、また説明をしていただくと。そうしないと、せっかく来られて運転手さんに聞いても何のことかわからないというような点が多々今までもあるようでございますので、そういう面はぜひお願いをしたいなと思っております。以上です。

○座長 神話等の歴史・文化をテーマとする観光誘客の展開ですけれども、意見少しまとめたいと思います。

やはり皆さん、観光全体そのものに対する言及が今回多かったと思います。その中で3つぐらいポイントがあると思いますけれども、一つはハード面、交通面ですね、その改善に向けての要求。特にJR線あるいは山陰線のアクセス向上に関して、もっと投資して、

まずハード面の整備を整えていくこと、これが第一条件ではないかという御意見、多かったです。

それから2つ目は、これ多くの方、言及されましたけれども、やはり島根県というのが全国的にも知名度が非常に低い中で、今回「古事記」1300年の取り組みに向けて千載一遇のチャンスといえばチャンスだと思いますけれども、それをどう生かしていくか。情報発信の仕方っていうものを、より一層工夫する必要があるんじゃないかということでした。

聞かせていただいて興味深かったのが、委員さんおっしゃったですね、やはり神話、歴史といって非常にわかりやすいんだけど、一方で、かたい説明、情報PRになってしまいがちだと、島根県自体のイメージもそうになってしまいがちなので、敷居を低くして、やわらかい、どちらかという取っつきやすいような方にシフトしたPRの仕方を工夫する必要があると。

あるいは、最後、委員さんおっしゃったように、じゃあ例えば「古事記」1300年、神話あるいは歴史・文化ということで島根にお客様をお迎えするにしても、県民意識を醸成していく手段として、市町村のトップであるとか公務員サイドという役人側がよくそれを理解しているだけじゃなくって、現場でおもてなしする人々を集めた説明会、これを重ねていくというのも一つ情報発信の方法として有効じゃないかという非常に興味深い御示唆をいただいたと思います。

3つ目ですね、一方で、やはり島根といえば歴史・文化、あるいは田舎や食という中山間地域のいろいろな地域資源というのも豊富だと。委員さんの皆様の中には、東京や大阪、都会で暮らされてIターンされて、私自身もそうですけど、今島根に住んでる人というのもすごく、委員さん今回多いですね。住んでみたらこそわかる地域資源というのを、じゃあどう発信していくのかと。それを今回神話という一つのキーワードで切り開いていくこと、すごく重要だと思いますが、やはり県民の理解ですね、我々、結構温度差があると思います。こういうところへ出てる者というのはわかると思うんですが、一般に暮らしてる方というのはなかなか神話の国と言われても、日常生活でそれをおもてなしする側としてアピールするということとはできていないと。そこのハードルというのをどういうふうに整えていくのかというのは、観光のソフト面としても重要じゃないかということだったと思います。

非常に興味深い示唆をいただいたと思いますが、執行部の方から、皆さんの御意見伺わ

れて補足等御発言いただければと思います。

○観光振興課長 皆様から大変貴重な御意見をいただいたと思っております。特にいろいろな面で、私どもが今後進める事業の核心に対するさまざまな示唆をいただいたというふうに思っております。

座長の方からもおまとめいただいておりますが、少し個別のことにつきまして述べさせていただきます。と思っております。

少し観光全般のことになりますが、観光は非常にすそ野が広い産業でございます。それゆえ経済波及効果も大きいわけでございますが、そのためには、やはり観光の担い手も非常に多いと、県民の皆様一人一人が担い手だということで、そこをいかに御協力いただいてこの事業を進めるかということが一番大きなポイントではないかと私ども思っております。それゆえ、この事業のコンセプトの第一に、幅広い県民の皆様の参画ということを掲げております。掲げておりますが、今御指摘いただきましたように、まだまだ浸透が足りないと思っております。そこを今後さらに強化していきたいと思っております。

ただ、具体的には、県では県の広報誌、それからホームページも今仮オープンしております。情報発信しております。それから今後、教育委員会の方でふるさと教育の一環で神話等に対する副読本を小・中学生向けにつくりまして、それを配布するといったようなことも計画されておりますし、市町村さん、それから民間の方からの提案事業に県が財政支援をする形で、さまざまなセミナーですとかエリアでのガイドブックやパンフレット、これらも順次作成されていきます。しかしながら、そのところ、きょうの御意見いただきましたように多くの皆さんに参画いただくために、おもてなしという点も含めまして事業をさらに強化してまいりたいと思っております。

それからもう1点、誘客のいろいろ御提案いただいております。誘客の戦略としては、歴史・文化といった学術性のみならず、御指摘のように「古事記」とか神話、万葉、これを非常に幅広くとらえまして、訴求力のあるテーマで、訴求力が一番フィットするような対象に働きかけていきたいと思っております。例えば縁結びパワースポットといったこと、神楽、こうしたことも既にテーマとして売っていきたくと思っております。それにつきましての受け地づくり、こちらの方も今後とも働きかけをしていきたいと思っております。

それから、アカデミック、アート、アミューズメントの3つの観点からのイベントも今後計画しております。県内外からの集客を図っていきたくと思っておりますけれども、そこに地域の持てる食とか温泉、こうしたものもたくみに織りまぜながら観光誘客を図り、

またもう一回来てみたいと思っていただくようにしていきたいと思っております。

最後になりましたけれども、アクセスの改善、2次交通等々につきまして御指摘いただいております。これも本当に非常に重要なテーマでございます。ただ、経費もかかるということで、私ども関係部局、機関と連携をとりながら進めておりまして、例えば伯備線の問題につきましては、以前からフリーゲージトレイン化を目指しましてさまざま国に要望しておりますが、JRさんの方でも、御承知かと思いますが、ゆったりやくも、これを順次導入図られておりまして、乗り心地の改善というところにもつながってきているというところでございます。

いずれにいたしましても、最後になりましたが、観光がすそ野が広いということはそれだけ担い手が多いということでございまして、県民の皆様きちんとして情報を伝達し、発信し、御参画いただける、これを肝に銘じましてこの事業を展開していきたいと思っておりますので、今後とも御支援、御協力のほどお願いしたいと思います。以上でございます。

○座長 続いて2つ目のテーマといたしまして、産業振興関係ですね、「県内企業と高等教育機関との産学官連携」について、皆様からまた御意見、お一人ずつお伺いしたいと思います。

○委員 産技センターがありますが、あそこで産業振興財団等で一緒に研究開発をしてらっしゃる商品が数々あります。LED、太陽電池、ジェスチャーカム、プラズマ、エゴマ等、前回の資料もありましたが、その研究開発の成果がすばらしくて、機会があつて見学したことがあるんですが、日本というか、島根の誇れる大変貴重な財産であるというふうに思います。県民はもちろんです、こういう小さな県でああいうすばらしい研究開発をしていることについて、子供たちが特に自信や誇りを島根県に持てる財産だと思って、今後、お金は限りはありますが、研究スタッフを増員したり、営業力を持つ交渉能力の高いスタッフをコーディネーター役を確保して、県内企業の橋渡し役の性格をより強めて飛躍して行ってほしい。そして、小・中学生の遠足コースではないですが、もうなってるかもしれませんが、一般の科学技術系の高校だとか高専だとか大学ではなくて、子供のときからああいうところに連れて行って例えばジェスチャーカムを見せるようなことをしておくと、この観光誘客と同じなんですけれども、県民理解が広がっていくし、自信が持てるふるさとができるし、県外から来てくれる友達や親戚の皆さんに自慢できるという構図ができ上がるのではないかと思います。

ただ、今言いましたLEDだとか太陽電池だとか、すばらしい施設があるんで業績も上

げていらっしゃるんですが、県民理解について、さっきの観光と同じなんですが、余り知らないのではないかと思って、それをどうやって県民に伝えるのかということが大きなテーマだと思います。以上です。

○委員 産学官ということですから、学でいうと恐らく大学、高専等になると思います。連携を図るということですから、そういう高等教育機関がどんなことをしてるのか、そういうことを積極的な情報公開しないと多分難しいだろうということと、それから、産業界との橋渡しという意味ではコーディネーターの役割はとても重要だなというふうには思うんですけど、何よりもやはり大切なのは、経営者がこれを望むのか望まないのか、そういう意欲を持った経営者がいるかどうかだと思うんですよ。技術をとにかく改善して改良して新しいものをつくりたいという、それを積極的に望む経営者であれば、別に島根大学じゃなくても、関西あるいは東北、北海道とか出かけて行って技術を集めてくるわけですよ。別にそこにコーディネーターいなくても成り立つわけですよ。したがって、この辺うまくいくかいかないかっていうのは、ひとえに、ひとえにというのは言い過ぎかもしれない、多くの部分は産業界の経営者次第だというふうに私は思っております。

とはいっても、じゃあコーディネーターは全く意味がないかということではなくて、今現在、産業振興財団で大分やっておられます。少しでもそういう連携を望む経営者の支援をするという意味でのコーディネーターの役割は非常に重要だと思います。

前回の説明で、岩手県との比較された表があったと思うんですけど、コーディネーターをもしふやせばもう少し連携が進むというのであれば、ふやされたらいいと思います。ここでは島根大学、鳥取大学出てますけど、別に山陰の大学に限った話じゃないですから、やはりコーディネーターというのは、日本全国あるいは世界でどんな研究されてるか、幅広い知識を持ってコーディネートするということが必要です。繰り返しになりますが、一番大事なのは経営者がどう考えるかということだと思っております。

○委員 他の委員のおっしゃったとおりで、企業、頑張りなさいと、頑張って就労できる環境を維持し続けて就業率が高まるように、企業がどんどんどんどんなくなっていくような状況にならないようにということの施策だろうと思います。企業の側で知恵を絞って、新しい事業展開、転ばぬ先のつえを考え出さないともう生き残れないわけですから、そういう意味では、もう必要な情報は自分で集めると、新しいわざであったりアイデアであったりをどっかから持ってきたり見つけ出して、そういうもので事業展開を図るのが、これもう当然だろうと思います。ただ、今国の方でも、世界の各国、追随をしてこられて

る、日本を追いかけてる、追い抜こうとしてる国に対して、もっと高度なものを早く生み出せというようなプレッシャーなんだろうなと感じております。

そういった中で、私は島根県というのは非常にそういう意味で、私の生まれ育った地域の中小企業の方々へのバックアップよりも、よりよい環境を得られているというふうに感じております。その辺では、島根県の執行部の方が、何とかせなあかん、何とかせなあかんという思いでこういう施策展開をどうしたらええかというようなことになってるんだろうと思うんですけど、私を感じてるのは、もう聞きたいときには十分に情報も提供していただけてますし、ただ、もっともっと深いところでのというたときに、そういうスタッフなりこまがおられれば、よりありがたいなというところじゃないかなと感じております。

そこまでいきますと、もうそれこそ実地で経験を積んでおられる、もっと我々のそれぞれの求められる企業に近い技術や知識を持たれてるスタッフをそろえないといけないというようなことになってくるんで、それもまた不合理かな。日本じゅうの学校だったり企業だったりのつながりで、島根県の方の執行部の中でパイプ役みたいところで引き継いでいただければそれでいいんじゃないかなと感じてます。大手の日立金属さんであったり、日本の中で有数な企業と言われてる島根県の中におられる企業さんなんかはもっと伸びて、その地場で我々のような中小企業が仕事をさせていただける環境、そういったところへの専門的な産官学連携いうのを十分にやっといいただければ、それで我々は飯が食っていけるんじゃないかないうふうにも感じております。我々の望むところの産官学連携と、またそういった一部上場の大手企業が望んでおられるところのしっかりした世界へ通用するよなというところで、もうちょっと我々も勉強しないといけないなと感じております。

○委員 今、各委員さんがおっしゃいましたように、基本的には企業主さんのニーズがどれだけ強いのかという問題もあろうかと思えますけれども、そのニーズと研究の成果等をやっぱりマッチングさせるというコーディネーターさんの御苦勞も大切なところではないかなと思えます。今配置をされておりますコーディネーターさんでちょっとなかなか大変なんだというお話が先般ございましたけれども、ぜひ増員をして、増員だけで解決できるもんでもないかもしれませんが、増員をしてそういうマッチングのチャンスをふやしていけるような体制づくりをぜひ強化をしていただきたいという点が1点と、それからもう1点は、高等教育機関の研究の成果が必ずしも十分公表されてないんじゃないかな、情報としてですね、大学あたりの研究紀要なんか、県立大学なんかは研究紀要を送っていただくんですけども、そういうすごい論文というのはなかなか読む気がしないという失礼な

んですけれども、なかなか時間的に読めないわけで、そういった、例えば技術的な研究の部分の縮刷版を、ぜひ各それぞれの商工会議所とか、そういう情報センターへ配布をされて、企業主さんが気軽にそういうものを借り受けて目を通すことができる体制づくりというのも今後必要なんじゃないかなと。これは大学の方と協議をしながら、そう時間をとらない縮刷版、本当に縮刷で、興味があれば問い合わせてくださいという程度のものでいいんじゃないかなと思うんですけれども、そういった気軽な情報を整理をして県民に広く、広くといっても限度がありますけれども、それぞれの企業主さんの活動の拠点拠点到に配布をしていくという努力を今後少ししていくべきではないかなと思いました。以上2点です。

○委員 まずは島根県の目指す方向性を決めて、例えば自然環境だとか、今から、特に水だとか緑だとか言われておりますが、そういったことだとか農林業、先ほどもテーマが出ましたが、観光等の目指す方向を県はどういうふうにとどこでやるんだということを決めて産学一体となって取り組んで、新商品、すぐれた人材をつくるべきだと思っております。

特に、ここにきょうも大学生さんがたくさん来ておられますが、大学生の方も企業に向いていたり、ただデスクワークというか、机の上だけの議論ではなくて、フィールドワークというか、出て行って私たちのところの企業に来ていただければ、いろんな問題が転がってるんじゃないかと思えます。企業の方もそういったことをちょっと取り入れていただいて、例えば、島根高専ですか、高専の方がつくられた電気自動車だとか、福岡の方にはある大学生がつくったラーメン屋さんがすごく繁盛してるところがあるんですけどね、大学生がつくったラーメン、そういったのもいいんじゃないかと思えますので、私はまずテーマを、島根県は何でいくかと、そういったテーマをみんなで考えて、そういったことに、特に大学生、一般の方も含めまして取り組んでいったらいいと思っております。以上です。

○委員 私も、初めてLEDが島根県発だということを聞いたときに大変感動しました。

今回こういう御縁をいただいているいろいろ私も考えたんですが、自分が温泉をやるようになってから何もわからない私はいろいろ勉強して、非常に今、将来の日本の縮図だと言われるような島根県にいながらいろいろ見ていますと、やっぱり高齢の方が多い、人口が減ってきて財政の収入が少なくなる、医療費、いろいろ考えると、温泉というのは予防医学的に使えるんだなっていうのが私の実感です。

それで、予防医学的にっていいますと、私、実際現場にいるので、お客様からの情報で、非常によそへ行っても効かなかった、温泉病院で見放されたのが治ったとかいう、いわゆ

る一般的に医学的にいうと主体的なもののコメントをいただいております。それを客観的にやはり医学的データベースをそろえることによって、基本的な数字、実績を出すことによって、それが島根県民にとってもいいし、それから、ひいては島根県が考えている滞在型観光、それから財政のためにも非常にいいんじゃないかなということで、今回こういう細かな話なんですけど、提案をしながら、また私自身もいろいろ勉強していきたいなということで、あえてこれを提案させていただきました。私自身もこれからちょっと大学院の方へ入ったりして勉強して、実績といいますか、数値を出していきたいなと思っておりますので、これがきちんとできれば、県民のため、それから、よそからの滞在型観光で二、三泊、1週間、もしくは国内だけじゃなくて海外からもお客様を呼べるんじゃないかなと思っております。これだけ歴史、自然環境が豊かな島根県なので、こういうことが産学官でできたらいいなと思って、一つ提案させていただきたいと思って今回述べさせていただいております。

○委員 御承知のとおり、島根大学とか島根高専とか松江工業高校とかいうすばらしい学校がございまして、その中には優秀なやっぱり学生さんもたくさんおられると思えますけど、その優秀な方が毎年相当、卒業されるとほとんどが県外の大手の企業に就職を希望されることが多いというように思います。

そこで、私は先般ちょっと新聞を見ておりましたら、これは東京の蒲田のわずか10人ぐらいの小さな企業でございまして、ここでスペースシャトルの一応部品をつくっておったと。そして、スペースシャトルもそれを使って成功したんだということが書かれておりました。また県内でも、「フォトしまね」ですか、県が発行しておられる広報誌に、株式会社ミライエ、ここもたしかわずか10人ぐらいの職員さんじゃなかったと思いますが、優秀な堆肥をつくって成功したというような。今後、あらゆる大企業の大きなものをつくる前に小さな面でのものをつくる場合には、こういう小さな企業が大変重要になってくるんじゃないかなと。そういう面から、何とか、県内の中小企業にどういう企業があるのかということも私たちもよくわかりませんし、そういう面もやはりいろいろと資料を出されて学校の方に周知されて、できるだけ県内に残ってもらうようにしていただきたいなと。

ただ、私のこれは想像でございまして、やはり大企業を希望するというのは、県内の中小企業よりは給料がいいとか、また就業規則がきちんとしてるとかというようなことが原因ではなかろうかなと思っておりますけど、そういう面からして、もしできるものなら、県内の小さな中小企業の方はやはり運営資金とかそういう面でいろいろと御苦労があると

思いますし、なかなかいい給料も出せないということもあると思いますので、県もなかなか財政的には苦しい面もあるかもしれませんが、先ほどどなたか言われたように、もしその会社がやる気があるんだったら、やはりそこにはある程度そういう助成的な面もやってあげて、いい技術者を県内に残すというようなことをぜひしていただきたいなと思っております。以上です。

○座長 「県内企業と高等教育機関との産官学連携」について、皆さんに御意見を伺いました。

いろいろ御意見いただいた中で重要だと思ったことですが、すぐれた島根県内の技術を発展させていくために、決してコーディネーターの数ではなくって、各産業分野に精通した人材というのをいかに確保していくのか。委員さんの方からございましたけれども、他地域と比べて本県の産業振興支援というのは決しておくれをとらない、むしろすごくよくしてくださってる面もあると。では、それをもう一步進めるにはどうしたらいいかと。広い意味での支援ではなくて、企業側が気づかなかったような深いところに入ってけるような支援、これを、すごく難しい課題ですけれども、一方で、産業振興の本質をついてるようにも思いました。このあたり、一方、島根県でありながら世界で戦える、通用できる技術、その情報提供、こうした面をどういうふうに補っていくのかということもございました。

執行部の方、産業振興課長から御意見いただければと思います。

○産業振興課長 貴重な意見ありがとうございました。

一つは、先ほどまとめていただきましたけど、やっぱりコーディネーターの話、どうつないでいくかという話が皆さんから御意見ございましたし、もう一つ私が思ったのは、これも広いですけど、研究情報というか、それをだれにどう伝えるか、どういう内容を伝えるかということになると思いますけれど、最後は企業と大学とか産業技術センター等をつなぐということですから同じことかもしれませんが、そのためにどういうふうなやり方がいいかということをよく考えていくべきだという意味だったと思います。

少し具体的な話をしますと、今コーディネートの方は、島根大学の方には連携センターに専任の方が4人おられます。ただ、1人は医学部とか1人は特許とか、総合的なコーディネーターは2人でやっておられます。それから一方で、私の課の方に1人、大学、高専に近い専任の方がおります。そっちが大学、高専の方の学の情報をつかまえると。今度は財団の方が、どちらかといいますと企業様に近い方のニーズをくみ上げるということで、そこ

は専任が1人と、それからテーマごとにスポットの非常勤の方が3人、あと兼務で何人かでやっています。

先ほどの話にもありましたけど、広くやるのか深くやるのかということで、島根県は、今ある条件というのは企業の数そのものもそんな多くないわけですし、そこを使うということになると、やはりなるべく深く伝えた方がいいということで、さっきの数をどうするかという体制も考えていかなくちゃいけませんけれど、今ことしからやっていますのは、少し小さい単位の5人10人単位のセミナーをやったり、直接そういう興味のある方とつなぐというふうな、そちらの方を掘り下げております。ただ、これ、いろんな意見ございましたけど、中途半端にならないように恐らくやらないと成果につながらないんじゃないかというふうに感じました。それは今後考えさせていただきたいと思います。

それからもう一つの、情報をどういうふうに出していくかということで、これは企業もあれば、広く県民の皆様の方の力添えでやっているので県民の皆様、あるいは子供とか、できる限り、情報の内容も違いますけどどうまく伝えていかなくちゃいけないと思います。

この話、少しありましたので、現在、大学や高専あるいは我々がどういうふうに出しているかということをお話ししますと、一つは、今ホームページを使いますが、それに加えて意思表示があった方にメールマガジンを、島大は500人くらいやっておられますし財団は2,500くらいやっています。それはある意味で深いんですけど、その目的のコーディネートまでいこうと思うと、ちょっとやっぱりやり方をもう少し考えていかなくちゃいけないし、広く子供に伝えようと思うと、それはそれでまた別のやり方を考えなくちゃいけないと思っています。どなたかの御意見にございましたけど、やっぱり大学と高専とこれは一緒に話をして、よりいい方法を探ろうと思います。

結論を言いますと、コーディネートのことと情報提供のこと、つながっているとしますので、より成果が出るようにやり方を考えていこうと思っています。ありがとうございました。

○座長　では、続きまして、商工労働部の3つ目のテーマで「高等技術校等における産業人材育成のあり方」と、今まで先ほどのテーマでも人材育成、言及ございましたけれども、お伺いしたいと思います。

○委員　高等技術校等における産業人材育成ということなんですけど、ちょっと私の意見が高等技術校に偏った意見になっておりませんで、私どもが今操業しています地域が西部の江津というところがございます、既存の工業高校がある地域で、そこにももともとは浜田

に高等技術校というのがあって、それが老朽化して、今回、益田の高等技術校と一緒に
られて何か新しいものを益田にということやというふうに聞いております。

前回もお話ししたんですけど、江津という地域と益田という地域の浜田市を挟んだ地域
的なもので、ちょっと通うとか通勤する、通学するというのには遠い距離だということ
で、ある地域にあるとか進学できる範囲での産業人材のあり方を教育機関が寄って話し
していただいて、うまく人材、世の中で活躍できる、また、家庭が求めておられる、と
にかく進学一辺倒志向のそういう教育でなくて、自分たちの住んでいるところにある
教育機関をうまく利用して、自分たちの将来を支えるわざであったり知恵であったり
というのを身につけて生きていけるような人材の育て方ということを意見として述べ
させていただきます。

ちょっと県が考えておられる高等技術校のあり方と相反して、あるものをうまく使
ってくださいよというような意見になってしまってるんですが、工業高等学校とポリ
テクカレッジですね、これの一气通貫の進学、そこへ向けては、中学を卒業される
ときに、地元で定住させたい親御さんの考えであったり御本人の考えであったり
がうまく教育機関に伝わって、とにかく県外の大学、島根大学でも地域でいま
す子供を送り出す環境なんですね。家庭で子供を育てながら通わせれる範囲では
ありませんので、江津から松江いきましたら、もうこれ県外みたいな感覚なんで、
もう広島大学行くのと同じような思いだろうと思います。そういったことも踏ま
えて、今ある地域で育てられる環境をうまく使って人材育成を考えられたらどう
かなという意見にさせていただきます。

○委員 西部校と東部校と、科目も違えば当然履修の年限も違うわけですが、1年
でやって卒業して本当に物になるんだろうかというのが端的な私の疑問なんですね。
私の事業主やってる友達に、1年でこういうのを習得した子を、もし銭金抜きで
余裕があるとなれば雇うかかって何人かの方に聞いたんですけど、全部だめ
でした。必要ならうちで育てると彼らは言いました。中途半端な知識は持た
ない方がおれたちは助かるとも言いました。やるなら徹底的にやっ
てから就職をしてほしい。やらないんだったら白紙の方がありがたい
と言いました。つまり、この高等教育機関というのは、必ずしも雇
い入れる側から、雇い主の方からはそんなに歓迎をされていない状況
なんではないかなと私は実感をしましたけども、特に建築とかそういう
部分で、1年間で建築の何ができるんじゃないと言いました。おれは
10年かかってようやく一人前になったんだとも言いました。1年
でそういう部分を勉強してやってきて結構生意気言うような者は、
おれたちは邪魔なんだとも言いました。

生の声ですよ、生の声です。

だから、やるなら徹底的に教育をする、そして地元に必要な人材として定着をさせる、やらないんだったらやらない方がいいと私は端的に思いました。それがすぐすぐに変えられるものではないというのはわかりますけれども、そういうふうな雇用主の雇い入れる側の人たちの声を聞きながら養成をしていかないと、勝手に養成をしても、勝手に養成はしてないと思います、聞かれたんだと思いますけれども、そういう声が非常に強いということだけは知っておいてほしいと思います。その上で、この高等技術校を運営していくんだとするならば、もう少し徹底した教育のやり方をとっていくべきではないかな、それであれば意味がないだろうと私は思いました。以上です。

○委員 高等技術学校において、学べる科の何々科というのがありますが、その変更の考察があってもよいのではないかと感じています。特に、先ほどから私言ってますけど、国の方、今までは中国に日本のJTBだとか近ツーとかが出てはいけなかったんですが、今回許可が出まして、現地の中国にも日本のJTBも出てもいいことになりました。で、募集する。そういったことにもなりまして、観光のテーマが上がっておりますが、私は中国語の会話科だとか英会話の学科だとか、そういったことだとか観光ガイド科、そういった科も必要じゃないかなと感じております、将来的に。

それと、年齢制限が18歳から35歳とか切ってる科もありますが、今定年された方もたくさんおられますし、60歳、65歳以上の方もまだ元気な方がたくさんおられますので、年齢制限なしだとか60歳以上の方だとか、そういったのがあってもいいんじゃないかと感じています。以上です。

○座長 以上、3名から御意見伺いました。

広い論点としては、産業基盤を地域でつくっていくためには優秀な人材確保が必要、その一方で、教育する側の意識として、地域に根差して人材育成していくという覚悟というか、そういうコンセンサスが産業界と教育界でとれているのかということですよ。また、若い人、定住希望の人を産業界に誘導していくようなやはり仕組み、もっと手厚くあってもいいのではないかと、また、高等技術校、再編に関する事とか、あと学科、年限ですね、そういう細かい点もあったかと思えますけれども、まとめて雇用政策課長からお願いできればと思います。

○雇用政策課長 きょうは大変貴重な御意見いただきまして、ありがとうございます。

いよいよ来年の4月に新しい高等技術校はスタートいたします。この高等技術校では、

専門高校に比べまして大幅に実習の時間を持つと考えております。例えば新設します機械加工科につきましても、年1、400時間の訓練時間のうち900時間以上を実習の方に費やすというふうにしております。ちなみに、高等学校の例えば工業高校の機械につきましても3年間で実習の時間が300数時間だということですので、そういう観点からしますと、この高等技術校では、まさしく実践的な人材を養成していくと思っております。

それから、新しい高等技術校は、まずはこの再編整備計画に記載してあります訓練科でスタートいたします。当然、今後訓練ニーズが変化するという事になれば、それに対応した学科の改編ということも必要かと思っておりますけれども、その際にはやはり国との役割分担を行いつつ、民間の専門学校、ここでやっておられることについては重複を避けて進めるということが大切かなと思っております。

最後でございますけれども、やはり産業人材育成というのは、高等技術校ひとりだけでできるものではございません。例えば小さい中学生ぐらいのときから物づくりにも興味を持って大切さを知るといようなことの取り組みを進めていくとか、あるいは中学校、高校の段階から地元企業の方を知っていくための見学をやるとかということも必要かと思っております。また、地域それぞれで産学官、教育関係、それから企業、それから市、町、こういうところが一緒になって、地域の人材はみんな育てていくのが必要だということをもみんな進めていく必要があるかと思っております。

〔休 憩〕

○座長 続いて、農林水産部の方のテーマに移りたいと思います。

まず、第1のテーマが「農業の担い手育成・確保」についてでございます。

○委員 ちょっと最初にお断りですけど、実は余り農業のことは理解をしておりません。いろいろたまに農林水産の方にお聞きしたり、あるいはきょうのためにいろいろホームページとか本も何冊か読んできたということで、余り専門的にもよくわかりません。誤解があるかもしれませんので、また何か厳しく御指摘いただきたいと思うんですけども、私が農業に対して抱いている、農業に対してといいますか、県の取り組みに対して思う印象は、本当にどこまでやるのという感じです。やっぱり農業というのは一つの事業ですからね、私、先ほど商工労働部でも経営者がどういう意欲を見せるかということを行ったんですけど、農業も全く同じ話であって、農業という事業が成り立つというような形を目指していかないといけないわけで、今までいろいろ聞いてるところでは、本当に手とり足とり、も

う本当にある意味非常に恵まれた産業だなと思っております。

前回いただいた資料の1枚目のところに、目指すべき将来像として、産業として自立する農林水産業と書いてありまして、具体的にどれがこれに該当するのかわかりませんが、本当にこういう産業にしてもらいたいと思います。最近、きょうもでしたけど、日経新聞に農業の特集が出ております。その中に、国として農林水産に対する、どのぐらい予算を使ってるのか、それに対してどのぐらいの生産物があるのかという数字も出ておりました。ちょっと覚えてはおりませんが、本当にすごい予算を国としても投入してるなど。それは全く県の段階でも同じはずです。以前そういう資料をいただいたことありますけど、すごい予算を使われてるなどと思っております。

という全体的な農業に対する印象を述べた後で、この「農業の担い手育成・確保」というところで、一つは、これよく言われることなんですが、やっぱり農業参入というところの障壁というものをどう考えるかということだと思います。企業の参入ということを勧めている、いろいろ緩和されてるということは聞いておりますけども、それでもやっぱり農業生産法人になろうと思うと、一般企業から見ると非常に厳しい要件がついてるし、農業生産法人でないところが農地使おうと思うと、それは非常に制約がある、地域的な制約もあるということで、決して一般企業が農業に参入してうまくいくというところは、いろいろ調べておりますと必ずしもうまくいかないとは書いてありますけども、それでも農業というものに対する何か障壁が非常に現時点でも高いんじゃないかなと感じはしております。

一つは、やはり多くの方が、農業をしたいという人になるべく農業に参入できるような形をとってもらいたいというのがまず1点と、それから、この資料の中では集落営農ということで説明を受けました。いろいろ事例とかもホームページなんか見させてもらいまして、一つの農業のやり方として、いいやり方じゃないかなという印象は受けております。やっぱり事業として成り立つ農業ということで集落営農方式よければ、これは当然進めないといけないわけです。

私が言いたいのは、だめならだめでいいんですけども、これね、とにかくもうかるような仕組みにしないといけないってことですよ。集落営農が、これが絶対いいという、そういうことはわかりませんが、農業としてきちんと働いている人が給料もらって、それから土地を借りてれば地代を払って、それでなおかつ利益が残るといって、そういう事業のやり方っていうのはどういうやり方なのかということ、やっぱりちゃんと考えてもらいたい。そういう体制に今なってる、そういうことの研究するようなどころがあるのかと

いうところをちょっと疑問に思っております。

そもそも、こういったことをまず県がやるというのがどうも私はよくわかんなくて、大体一般のほかの産業ですと、皆さんが組合つくって協同組合の中で皆さん考えてやられる。農業でいうと農業協同組合が考えてやるんじゃないかなと思うんですけども、農協がちょっとどういうことされてるのかわかりませんが、県の方がこんなに一生懸命やっておられるというのが、何か非常に違和感を感じるというのが私の実感です。

とはいっても、農業をやっぴりきちんと事業として成り立つ形をとることが必要だと思いますので、じゃ、どういうふうな農業をやればいいのか、成り立つのかということ、やはりとことん研究してもらいたいと思います。それでとことん研究して、できない部分、どうしても足らなければ、それは最終的にお金を出すということがあるのかもしれないけども、今考えてる戸別補償ですか、そんなのはちょっと一般、多くの国民の理解は得られないと思います。以上です。

○委員 私も農業の方はあんまり得意じゃなくて、委員と同じような話になるんですが、我々の工業の方も労働力の確保は難しいようになってます。それは何やいうたら、若者が仕事として選択したいかどうかというところ、さきにもおっしゃったように、利益確保ができて、やったことに対する対価がいいなと感じられる職業かどうかというところに通じるんじゃないかなと思っています。その辺のところの難しさは我々も共有はしてるんですが、そこへもって、今の島根県の豊かな自然であったり、住みやすさであったり、人情味があったりというところの古いよい時代の日本が残ってる地域へ、都会地からそういった中で生活したいと思われる方にIターンの移住を支援しようということで、定住者をふやしながらそういうことに従事される担い手を確保していこうという施策はいいんじゃないかなとも感じてます。ただ、根幹は、魅力ある産業にどうするかというところじゃないかなと思います。

また、他の委員が後でもおっしゃると思うんですけど、そういう農業に従事する地域に今情報の伝達がうまくいってない地域があると。インターネットがうまく使えないとか携帯電話が使えない地域の多くに、そういった農業を営んでおられる方がおられるんじゃないかな、そういったところの地域のインフラの整備をするのに、どういう形で県がバックアップされるかいうところを期待したいなと思います。以上です。

○委員 私もちっと農業のことは本当にわからないので、口を出していいのかなと思いつつながら発言させていただくんですが、実際若い人にとって魅力のある職業かというのがや

っぱり一つ大きな点だと思います。最近、農業が若い人に見直されてきたという新聞記事をこの間ちょっと読みまして、若い、何ですか、ノギヤルですか、何かあんまりそれがいいのか悪いのかわからないですけども、そういった特集も組まれたりして、何か物をつくるということに対してすごく興味を持ってる人が以前に比べたら随分ふえてきたんじゃないかと思います。

なかなかちょっと就職が今難しいという時代もありますので、これがチャンスだと言ったらいけないのかもしれませんが、こういったことをうまく引き出していけないかなという点が一つと、あと私、定住するに当たってとか農業するに当たっていろんな何か助成金があったりとかこういう研修費用があるということ、実は全くこの会に出るまで知らなかったんですね。私が興味がなかったから、あえてそれを目にしてももうスルーしてしまったのかもしれないんですけども、そういった情報というのがどこまで皆さんに伝わってるのかという点ですね。

それと、ちょっとわかんないですけど、農林高校とかそういったところがあると思うんですが、そういう人たちがどのくらい農業にじゃあ実際に従事してらっしゃるのかって、以前ちょっと、勉学を3年間習ってもそのまま違う会社に入ってしまったたりとかして全く携わってない人の方が多いんじゃないかなと思って、そういうせっかく学んできた人たちをどうやって取り入れていくかというのもまた考えていただければいいかなと思います。以上です。

○委員 これからちょっと申し上げたいのは、農業の担い手を確保・育成していくために、例えば集落営農なんかの担い手を考えますと、集落ぐるみで、Uターンしたり、あるいはIターンをしたりする希望を持つてる人に対して、私たちの集落ではこういう農地をこれだけ準備できますよと、住宅はこういう住宅を準備できますよ、それから村ぐるみで、来られた方に対してはこのようなサポート体制をとりますよと。いわば受け皿といいますか、農場を準備して、そうしてその準備した農場の情報を発信する、そうして、希望者があれば相談に来てくださいと。例えば1カ月とか、1カ月は少ないかわかりませんが、しばらくの間住んでいただいて、いろいろ村の人とも交流して判断をしてくださいと、こういうように集落の方で受け皿を準備して情報発信する。今の政策というのは、希望者来てくださいと、いろいろ相談に乗りますよということなんでね、支援センターみたいな相談の機能を持った制度あるんですけども、それよりもやっぱりもう一歩進んで、Uターンしたい、あるいはIターン考えたいと、そういう人たちに対して受け皿をつくって情報提供

する、そういうことを少し積極的に考えられないものかと。これにはやっぱり集落の人たちが頑張ってるんじゃないので、いわば集落力といいますか、地域力が問われるわけですけども、そういうことはどうかなというふうに思っております。以上です。

○委員 先ほど他の委員さんから、農業って事業でしょう、それなら一人で食っていけるという話がありましたけれども、事実、農業で食っていくのは非常に難しい時代であります。それは仕組みが悪いと言われようが何と言われようが、そういう、ならやめてしまえと言われてもやめられないのが、基本的に農業という業が持つてゐるさがだと私は思います。それは島根にとっては非常に大きな問題だと思います。

その、やめられないけど産業にもならない農業を維持をしていくための担い手をどうするのかという問題があるんですけども、私のまちにもたくさん新規就農者が入ってまいります。遠くは岩手県の方から奥さん、子供連れで入ってきて今頑張ってる、今度出てきますけれども、オーガニックのあれで成功している人もおりますし、いろんな人たちが家族連れで入ってきております。それをまちとして非常にいろんな形で受け入れをしているんですけども、就農して自立をしていくためにはさまざまな壁があるわけですね。しかも見知らぬところに入ってきて、だれも知ってる人はいないというところへ入ってきて、いろんな壁があるんですけども、その壁に対して町村役場も、先ほど家の世話から農地の世話からいろんなことを世話をしながら進めているわけですけども、そういうふうなさまざまな壁をもうワンストップで相談に乗っていただけるようなセンターが、できれば農林振興センター単位ぐらいにあると、それと協働しながら町村役場も産業振興課、頑張っていけるんじゃないかなという気が、一つにはしております。

それと、最近では定年を早くやめて帰ってきて百姓やろうかなという人も結構いらっしゃるんですけども、新しく、それこそ農業やったことのない人が農業やろうかなという決断をするには非常な勇気が要るわけですね。そのために就農準備校のようなものがないかなと思うんですね。これは、これまでの新規就農の、例えば1年間何万円かの助成をしながら育てていく、優良農家にお預けをしてやっていくという、そういうものではなくて、仕事しながらアルバイトしながら片足だけ百姓に突っ込んで、もしかしたら突っ込んだ足抜くかもしれんけれども抜かんかもしれんという、そういう就農準備校のようなものが、できれば農業大学校あたりを基盤にして、仕事をしながら週に1回農業準備校に行くよ、就農準備校に行くよというふうな、そういうふうなことで新たな動機づけができないかなというふうなことを実は考えております。

そのことと、もう一つは、新規就農しても、先ほどから言っておりますように農業だけで食っていけるというのは大変な難しいことなんです、今の時代、何と言われようが。何と言われようがなかなか難しいことなんです。だけれども、専業農家としてやっていきたいと新規就農してくる人は年々かなりいらっしゃるわけですね。その人たちが定住をしながら地域の担い手になっていかれるわけですが、専業農家プラスアルファの生き方を考えるような新規就農支援、支援というか指導、そういうふうなものを考えていけなかなって思うんです。それは県と、それから町村とで協力をしながら、プラスアルファは将来的には消えていってもいいんですけども、農業が定着をしていくまで、軌道に乗るまで農業プラスアルファの生き方をできるような支援をしていけたら新規就農の人にもいいんじゃないかなという、そういうことを担い手育成について考えております。以上です。

○委員 私、ここに書いてあるとおりで、島根県は東西に幅が広いので、本当に東部と西部と自然環境が大変違ってると思っています。東部の方に来ると広々とした斐川平野があって農業が盛んなんですが、それなりに非常に力強く感じることもありますし、西部の方に入ると何か本当に段々畑的な小さなものが多くて、されてる方大変だなという感じで見ております。自然が非常に影響するので、収穫間際に自然環境が悪くなって非常に影響受けるなというのは人ごとでないように胸を痛めてるんですが、そういう中で、IターンであろうがUターンであろうが、島根県で農業に携わってくださる方、その方たちのために、私も西部、それも温泉津という狭いところにおいて、非常に電波環境が悪いのにびっくりしております。東部にいらっしゃる皆さん方にはおわかりにならないと思うんですが、まだ光ファイバーは来ないし、携帯電話もドコモだったら通じるけれども、ソフトバンクとかエーユーもつながらないところが多い。それで、ラジオはもちろん私どもつながる部分はあるんですが、私の自宅ではNHK入らないです。ですから、先ほど他の委員がテレビを聞いてるとおっしゃってるんですね。私もまさにそうです。NHKをつけて、天気予報を聞くためにテレビをつけないといけないんですね。そういうのでNHKに話もしたことあるんですが、やはり人口が少ないですから、NHKも、別に温泉津だけじゃないですよと、柿木村へ行ったらもっとひどい状態ですと開き直られてるんですが、やはり迎え入れるために就農の学校も必要だと思います、補助金も必要だと思います。でも今こういう情報化時代なので、インターネット、電波の状態をよくしてあげることが、やはり快適な生活、情報源、昼間はいろんな方、夜もかもしれないんですが、いろいろなことがやはりインターネット、ラジオで聞けるということは、仕事をしながらラジオを聞いて楽しく仕事がで

きるかもしれないし情報が得られる時代なので、そういう環境を整えてあげることが、島根として、大丈夫だよ、楽しんで、それでわからないことは、地元の人もあるけどインターネットでも調べられるよというような環境づくりをしてあげてほしいし、そういう状況になってほしいと思っております。以上です。

○委員 それじゃ、今そこに農業公社への支援という項目を上げております。これは私の大変不足な面がございまして、先般いろいろと状況をお聞きをしたところでございますけど、私は農業公社というのは、どうしても地域の高齢化や、また農業の担い手がどんどんいなくなると、そこで県の支援のもとに農業公社をつくってそこに若い人たちを集めて、田んぼとか畑の荒廃を防ぐために働く場をつくってやるというような考えをしておりました。ところが先般お聞きしたところ、この農業公社というのは、県が一応県の外郭団体の農業公社へ支援をして、その外郭団体の農業公社が各町村にある農業公社を支援したり指導するというところをお聞きをいたしました。

私も帰りましてから、隠岐には農業公社がございまして、それでその責任者の方にいろいろと事情を聞きました。また、隠岐の島町役場の農林課の方にもいろいろと現在の状況を聞きました。そうしましたところ、県内では10カ所ぐらいしかないんじゃないかと。そして、あくまでもそれは各町村の任意でつくられたものであるんだと。それで外郭団体の農業公社からの支援というものは全くないと。そのために、その施設を持っている町村が独自に支援をしてるんだと。それで隠岐の場合も隠岐の島町が1,000万円毎年支出をしておいて、もう既にこれが大変な困難になって今後どうするかということで今協議をされて、ひょっとしたら、場合によっては、これは廃止をされる可能性もあるんじゃないかなというような現在状況だそうです。

ただ、御承知のとおり、隠岐の場合には、隠岐だけじゃないと思いますけど、大変面積が農業の場合でも狭いもんですから、農業だけではもうこれは食っていけないことは以前からわかってございまして、半農半漁、または農業とあわせてどっかに勤めているという方がほとんどでございまして、せつかく、しかし、農業公社ができて現在9名ぐらい職員さんがどうも働いておるようございまして、現在お年寄りになって農業ができなくて荒廃をしつつある田畑をその公社が請け負ってやっていると聞いておりますので、何とかこれは、県が直接関与はされなくても、外郭団体の農業公社を通じてでもある程度の支援がしていただければ大変ありがたいなど、そうすることによって農業の荒廃も防止されますし、若い人たちもそれなりに収入ができれば続いていくんじゃないかなと思って

ここへ上げたような次第です。以上です。

○座長 非常に重要な御示唆いただきましたけれども、まとめますと、島根県、農業の担い手といったときに若い人、就農だけではなくって集落営農ですね、担い手の一つとして大きく位置づけられてる、また、全国的に見ても島根県では早くから集落営農に取り組み、法人化に関しても実績も重ねられてるということですよ。

そうした中で、詰めていく中でいろいろな個別のテーマもあると。例えば委員さんからは、じゃあ実際に集落で農業の担い手を新たに受け入れるということであっても、本当に定住するための一歩進んだ心のケアまでを含めたサポート、これをどこまでつくれるかというのが現場では課題になってると。

また、委員さんからは、まさに本当に現場に密着した深いテーマをいただきましたけれども、農業というのは自立、産業という点からだけでは考えられないと、農業をやめられないというのは、農業自体、産業のさがだというふうなお言葉もありました。じゃあそうした場合に、農業だけではもう生きていけない、プラスアルファの部分はどういうふうに行行政側として提供できるか、ここが問われているんじゃないか。特に新規就農の人を農業に呼び寄せるには、農業の魅力を語る以外の部分ですね、そこをどう補っていくかということであると思います。

また最後、委員さんからは、農業公社に関しても支援がより必要じゃないかということもございました。広いテーマ、担い手育成を抱えてると思われま。

執行部の方から、これらの意見に対して御意見伺いたいと思います。

○農業経営課管理監 最初に、委員さんからございました、もうかる農業、大変厳しい御意見でした。他の委員さんもございましたように、なかなかもうける農業が難しいということも事実でございます。ただ、現場で、特に条件不利地域では農産物生産だけでやっていくということだけでは収益が上がらないということから、集落営農も含めて経営の多角化を現在一生懸命進めてるところでございます。農産物を加工して売っていく、あるいは農村ツーリズムをやっていくというようなさまざまな工夫を現在進めておまして、例えば出雲の方では、酪農家の方がパン屋を経営してすばらしい経営をやっているということもあります。すべてがすべてこうできるわけではございませんが、少なからずそういう方向に進んで収益構造を少しでもよくしていくという点が必要だと考えております。

さらに、なぜ県がやるかという部分について、これは非常に難しいところではございますけれども、一つだけ言えるのは、私ども県の方は、現場に対して技術指導、経営指導、さ

らには事業というふうなワンパッケージでやれることができる能力を持っております。そこまでやるのかどうかということは別にしまして、農村を支えるかなりの能力は持っていると考えているところでございます。

それと、他の委員さんからありました、これ2つ重なる部分なんでございますけども、集落ぐるみでU・Iターンを受け入れていく受け皿をきちんとしてそれを情報発信していくようなところでございますけども、実は私どももこれ非常に重要なことだということを、相談をしている間でやっぱり気がついてきました。というのが、いろんな人が就農相談会に来たときに、希望は来るんですが、どこに入れてあげようというマッチングが実はなかなかうまくいかないというのが正直なところでございました。ということから、現段階では事業として進めてるわけではございませんけども、集落側からどんなことが提供できるのかということのを就農相談員の皆さんに伝えていく、要するに、受け皿がどんな条件を持っているかということを知りつつ就農相談に当たっていくことをやり始めております。これは、ひいては集落営農あるいは認定農業者さんの次の世代を育てていくということに大きくつながるというふうに思っておりますので、委員から言っていただきました、いわゆるテストマッチングも含めて、今後大いに検討していくべきことだと考えております。

それから、委員さんからございました相談センター、大田市でも支援センターがございまして、恐らくその辺は御存じの上で言っておられると思いますけども、県内には各市町村に担い手支援協議会というのがございまして、市町村と農協と、それから我々県の普及部、そして農業委員会など関係の機関が集まった協議会ができております。そのところが、いわゆる新規就農者などの相談を受け入れてワンストップサービスをするようにしております。ただ、その受け入れた人のコーディネーター機能というのが、やはり非常に大きくこれは左右する部分だと思っております。そういう面で、この担い手協議会あるいは支援センターへのソフト的な支援が、県としては非常に重要なことだと思っております。

ただ、これ残念なことに、昨年の事業仕分けで国のこういうソフト的な予算が切られてしまいました。大きく予算減がなくなってしまっているところで、微々たるものではございますけども県単でその辺はことしから支援を続けておりまして、また、支援センターの皆さんと、いわゆる相談職員の悩み事も聞いていくというようなことも現在している、また計画しているところでございます。

それと、定年就農に対する就農準備校みたいなものということでございますが、既に農

業大学校でそういう講座をさまざまなものを4コース設けていますし、それから、大田だけでやるわけにまいません。県内で各市町村が、そういう特に定年の人などを相手にしたいいわゆる農業講座というものを現在20コースぐらい設けておまして、恐らく350名ぐらいが受講しておられます。半分以上、恐らく定年ぐらいの方々だと思います。そういう方々が地産地消に入っていただくということで、いわゆる農業の底力をつけるという意味で今頑張ってるところでございます。

もう1点、農業プラスアルファ、これにつきましては、先般お配りいたしました資料の5ページに、UIターン就農者定住定着支援事業という言葉が書いてございます。農業だけでは成り立たないから、農業プラスアルファ、いわゆる兼業も含めて支援していこうという事業をことしから始めておまして、現在5市町が手を挙げて、今、委員さんが言われたようなところも支援していくところをことしから始めておまして、まだ成果が出ておりませんが、こういうことも含めて一人でも多くの担い手を育てていこうということを考えてるところでございます。

最後に、公社の件でございますが、直接県として市町村の公社を支援するということはございませんが、やはり農地の貸し借り等々、それから農地を集積していくこと、あるいは住宅の部分について、これは農村、農業を支えていくサポート組織としては非常に重要なものであると考えていますので、この辺のサポート体制をどういうふうにしていくかということについては、やはり公社に限らず、そういうサポートのものは非常に必要だと思っております。今後検討するに値するというところで一生懸命今考えているところでございます。

○座長 引き続き、2つ目の「有機農業の振興による島根農業の活性化」について御意見いただきたいと思っております。

○委員 これについては、基本的に農業者が考えることだと私は思っておりますので、特段意見はありません。経営者がどういう方針でやるのか、それは農業経営者が判断してやること。

ちなみに次のテーマでいいますと、個別の自分がつくったものをどう売るかというのは、まず農業者が考えることだと思っております。

○委員 これも他産業に相通ずることやと思うんですが、何がしかの差別化というところで、売り物に有機農業ということで付加価値をつけられてるんだらうなというふうに感じております。それが差別化につながるのかどうかというのがもう一つわからないところと、

食の安全ですね、そういったことで何とか消費につながるようなという取り組みをされているんだろうと思います。活性化に直接つながるものかどうかというところを、それぞれよく考えていただいて臨まれるべきだなと思います。

○委員 有機農業というのが、私たちみたいなわからない人間からすると、普通の農家さんやるよりも何か手間がかかる、大変というイメージがあるんですね。ですから、それに伴うだけの収入が得られるというか、ちゃんともうかるということが前提でないと、これにかかわる人というのはどんどんふえていかないと思うので、そのあたりをしっかりともうちょっと明確にわかるようにしてれば、もう少しこちらの方に入る方がふえるんじゃないかなと思います。

○委員 県がさまざま講じられている担い手の掘り起こしの政策に期待したい。例えばオーガニックアカデミーなど期待できると思います。ただ、きょう、この項目で申し上げたいことは、有機農業を振興していくということは、安全で消費者に好まれる生産物を提供していくという、そういう直接的な効果のほかに、その地域の環境の保全、あるいは生物多様性の保全、そういうお金で計算できないようなさまざまな効果が期待できる。

例えば、これちょっととんでもない例かも知れませんが、佐渡島でトキを人工飼育して、これ放鳥に成功したわけですね。これは周辺の田んぼを中心に農薬を減らして、いわば自然環境を整備したと。例えばカエルがいるとか昆虫がいるとかドジョウがいる、そういう生物多様性の保全、確保ができた。これが成功したんです。出雲でもそれやりますけども、出雲で放鳥しようとするれば、そういったことをきちっとやらないといけない。そういうことが有機農業との関連で、私は大きな効果としてこれを消費者に積極的にPRすることができるんじゃないかというふうに思っております。このことは、国民を挙げて、国を挙げて農業の支援をしていかないといけない面があるということで、これは委員が厳しい御指摘をされましたが、その回答の少し一部にはなるかなと思っております。以上です。

○委員 食の安全・安心を求めていく消費者行動ですね、そして地域の環境保全のことも考えて、今言われましたように、これからは多分有機農業の時代になるだろうと思っております。したがって、今のうちにというと大げさですけども、今のうちにそういった基盤を島根にしっかりつくっていく、そして、それにかかわっていこうとする人たちを育てていくということは、島根の農業の将来にとって非常に大事なことだろうと考えております。

そして、その島根の有機農業をより振興していくためには、島根にも、島根だけじゃな

くて有機JAS規格の認定制度がありますけれども、その認定を受けている生産者もたくさんいらっしゃるけれども、生産者も、それから消費者も含めてまだまだ認識ができておりません。私も広島でお店を1軒やっておりますし、邑南町でも産直の店を1軒経営をしておりますけれども、そういったところへ来て農産物を求めていかれる人たちといろんなお話をするのに、農薬使ってませんかとかいって聞かれる方はありますけれども、有機農業の何たるかということまでをしっかりと認識をしている人は非常に少ないですね。ですけれども、有機農業は何しろ健全な土をつくるということが土台でございます。したがって、そういったことも含めてこれから国民全体に、島根県民だけではなくて、県外の人たちにも、島根県の農産物を買っていただく人たちにもしっかりとPRをしていく仕組みをつくっていかねばいけないと思います。我々末端で消費者に接する者もそういうふうなことで御協力をさせていただこうと思っておりますので、ぜひ力を入れていただきたいなと思います。

それから、オーガニックアカデミーの構想も非常にいいと思いますので、そういったことで人材育成を積極的に進めていただきたいと思います。以上です。

○委員 私もほとんど他の委員と同じなんですが、同じ有機農業を進めるのであれば、有機JAS法に基づいた有機農業を広めていただきたいと思います。そうすることが、最終的には輸出関係でもしっかりと今後島根県の有機農作物が海外にも輸出できると思うんですね。それとともに、農業に携わってる方のみならず、やっぱり一般の方、近隣に住んでる方も有機農法がどういうものかということをしっかり理解していただくことによって有機農業が広まっていきますし、有機JAS法に基づく農産物の生産につながると思っています。

質問のときに、私、有機ハウスということをお伝えしたんですが、それは将来的に全部有機のもので家をつくる、その後、有機の寝具、有機の家具、それから有機の食品でホテルができるような形になるものが私が思ってた有機ハウスなので、そういうものを島根県のオーガニックアカデミーでああいうところで作られて、国内で、それからまた海外で結構有機ハウスに泊まれる方というのもこだわってたくさんいらっしゃるんで、それがまた観光つながるような形で、縦のみならず横のつながりで、商工労働部と農林水産部が活気づいて一つの何かの目的に向かって共同作業に進めればいいなと思っております。以上です。

○座長 皆様方から、有機農業の振興による島根農業の活性化について御意見いただきま

した。

皆様方、有機農業に対する非常に期待は高いと。ただ一方で、幾つか御指摘いただいた点、一つは委員さんからございましたけれども、有機農業は、特に島根の農業をつくっていく基盤としては非常に重要だと、特に人を育てていくこともこれから長い目でやっていく必要があると。ただ、現場で実際直売所を運営されてる中で、やはり有機というものは、生産側さんと、あるいは消費者側さん側との情報のずれというのも一方であると。有機を求める消費者さんであっても、有機農業何たるか、そこまで理解してる人っていうのは極めて少ない、このギャップというものも政策的な課題として埋めれるとこを埋めていく必要があるということだったと思います。

それから委員さんからは、有機農業というのは直接的な食品への効果以外に、自然環境保護の面も実は非常に強いということもございました。そういう多面的な効果がある有機農業ですけれども、一方で、今後オーガニックアカデミー、県の方も推進されていくということです。

最後、委員さんからもございましたけれども、オーガニックアカデミーの運営等についてまた補足していただければと思いますし、アカデミーの施設運営、その販売等での収入というのを運営につなげていくのかとか、そのあたり少しまた補足していただければと思います。

では、執行部の方からお願いいたします。

○農畜産振興課長 いろいろ御意見いただきまして大変ありがとうございました。

今、座長の方でもおまとめいただきましたけれども、ちょっと二、三御説明させていただきます。

先般も説明の中で申し上げましたように、有機農業を今後、島根農業の一つの柱、柱はほかにも幾つかあるというふうに考えておりますが、その中の一つの大きな柱として位置づけたいということで、今回この会に御提案をさせていただきました。先ほど来お伺いいたしますと、ほぼ皆さん方から肯定的な御意見をいただいておりますことに、我々も力強く思っているところであります。

その中で、生産者と消費者のずれといいますか、意識のずれというのがやはり大きな課題だろうと思っております。生産者側での判断ということもございましたけれども、それはそれで大変重要なことですが、買っていただく方へ、もう少しやはり有機農産物あるいは有機農業というものを意識していただく、あるいは理解していただく取り組みという

のが生産者側にも必要ですし、やはり我々それを進めていく側にも非常に重要な課題だというふうに思っております。そういう意味で、先般申し上げましたけども、消費者と生産者とのネットワークづくりというのをことしから徐々に始めておりますし、消費者の皆さん方の環境農業宣言というのを平成19年からやっております、先般も2,700ほど宣言者が出ているということをお知らせしましたが、その中の一部ではございますけども、消費者の方をグループ化いたしまして、この有機農業なり環境農業についての勉強会もことしから始めさせていただいております。そういう取り組みを、来年以降ももっともっと拡大していくような方向で検討したいと本日思った次第であります。

それから、それにあわせて、有機農業の基盤づくりなり生産の面的な拡大も含めた基盤づくり、こういったものも、やはりさまざまな施策を講じながら検討してまいりたいというふうに考えております。

それからあと、オーガニックアカデミーにつきまして大変御意見をいただきました。オーガニックアカデミーにつきましては、農業大学校を中心に、初めての試みですけども、農業大学校だけではなくて、実際に有機農業をやっている農家の生産者の方、あるいは法人も含めた生産者の方々のところもネットワークを組んで、サテライト校という形で座学と実践を両方学べるような、新しい農業大学校といいますか、アカデミーにしたいというふうに考えております。まだこれからでして、その指導者養成をことしと来年にかけてやることにしております、実際に開校、学生を受け入れますのは24年からでございますけども、23年からは一部短期あるいは長期の研修も試験的に始めたいというふうに考えております。またその際にはいろいろ、皆さん方の御意見といいますか、いろいろな御要望などもお聞かせいただきながら、よりよいオーガニックアカデミーにしていきたいというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

○座長 では、最後のテーマ、「農林水産物の販路拡大」、これは消費者、我々としても非常に大きな関心事かと思えます。御意見いただきたいと思えます。

○委員 私の意見としては、有機農業のところにも書かせていただいたんですが、手間暇かけた安全な食材、それをうまく消費者に伝わるような宣伝の工夫、売り方で安全性を訴えたり、環境に配慮したという物づくりをしてるところをどう伝えるかというところを意見として述べさせてもうてます。

大阪での事例で、生産者の顔が見える売り方をされてたスーパーマーケットがありまして、新潟の魚沼産、だれだれさんがつくっておられて電話番号がここですというようなこ

とが書かれてて、おいしかったというような消費者の声がたくさん何かグラフでかいてありまして、そういうようなことで、あっ、これはうまいのかなと。ただ、値段は、こちらで仕入れてる価格の、私が買わせていただいている価格の3倍ぐらいの値段で売っておられました。

そういったところの話とか、商工労働部との連携で島根県へ訪れられた方に食材として提供されて、それが生産者の顔がこうで、こういう作り方の安全なものなんですというようなことの、これも商工労働とやっぱり連携をされて物をつくって売られるというようなことになればいいんじゃないかなというような意見を述べさせていただきます。

○委員 私は全国のPRの前に県内でというふうに書かせていただいておりますが、前回の会議でもちょっとお話しさせていただきましたが、実際にこちらに今、きぬむすめとか、あすっことかトルコキキョウ上がってますけども、実際に島根県でどこで食べれるのかというのがわからない部分がちょっとあるんじゃないかと。あすっこは割とスーパーでもよく並んで、実際苦みも少ないですし、よく食べたりはするんですが、お米に関しては、せっかく何かブランド推進課さんの方で、ふるさと、何でしたっけ、何かありますよね、何とか指定店みたいな、ありますよね、ああいったところでもっときぬむすめを取り上げてもらうように働きかける。もちろん価格的なこともありますのでなかなか難しいところはあるんですが、島根に行ったらこれが食べれるよというふうな感じにならないと、まずちょっと知ってもらえないんじゃないかなと思うので。

それと、ちょっと残念なのが、ちょっとインパクトが実はこれ、ごめんなさい、薄いなと思うのが、これを島根に行ったらじゃあ食べれるから、私は観光の方からどうしてもいってしまうので、これ食べたいから島根に行ってみようと、じゃあ思ってもらえるかなと思うと、ちょっと弱い部分が少しあるような気がするんですね。ですので、何かぜひ、今回農業の方がちょっと中心ですけど、水産物の方もそうかもしれませんが、もっと何か、島根に行くとこれがあるんだよというPRになるものをぜひ期待したいと思います。よろしくお願いします。

○委員 この項目につきましては、県の方で書いていただいていることはそのとおりです。この価格設定交渉というのは、生産者の側から見て、特に市場外流通の場合、非常に大事な戦略だということを思っています。これはせんじ詰めればマーケティング戦略の一環ということになります。

きょうここで意見として申し上げたいことは、島根の農林水産物をいろんなところへ売

っていくために、一つは、やっぱり大消費地に向けて島根の特徴を強調しながら売っていくという、そういう方法と、もう一つ大事なのは、産直市のような形で地産地消って非常に大事だと。産直市で特に農協が持ってるマーケットの売り上げちゅうのは随分上昇してまして、例えばくにびき農協の管内ですと、どうでしょうかね、6億とか7億ぐらいいくんじゃないかな。それから、雲南農協の管内でもそれくらいいくと思いますね。県からいただいた資料で、トルコキキョウはかなり頑張ってるやっておられて20年度に1億突破したということですけど、これ1億突破するのなかなか大変なんですよ。そのことを思うと、小さい単位ですけど、たくさんの方が参加して産直市で地産地消をやっていくと、これ非常に私は注目して大事なことだと思っております。

そういう意味で、販路の拡大は、やっぱり一つは大消費地へ打って出る、特に市場外流通が主になってきますから、その場合に生産者側から、いいものは高いんだということで価格設定交渉をきちっとやると。そういったことが大事です。一方で、地産地消のようなことで産直市場の振興に一層の尽力をしていただきたいと思います。以上です。

○委員 私も今、他の委員さんの御意見と余り変わらないんですけども、農産物は、つくるよりは売るのが難しいです。つくるのはある程度やればだれでもできます、ノウハウがあればね。だれでも売るのはだれでもは売れません。農産物の流通は、基本的に市場流通、市場を通して競りにかけられてあなた任せの値段で売っていただく流通と、それから市場外流通、市場を通さずに、このあすっこは200円でないと売らないよと自分たちで値段をつけて売る売り方、その2つがあります。これをうまく使い分けていくことが大事なことだろうと思います。片方だけではなかなか成り立たないだろうと思います。

そういう意味では、流通業者の人たちの知恵もいただかれながら、私たちのまちのコシヒカりは全部、生協ひろしまへ値段をこちらでつけて売るようになっております。市場外流通ですね。そういうことも流通業者の人たちの知恵をもらわれて、こちらで値段をつけて売る方により多く割り振りをされた方がいいと思うし、さっきもおっしゃいましたように、地産地消がまず基本です。学校給食、施設給食、病院給食、いろんな形の中で地元の野菜や米を十分使っていただくということが、まず第一です。余った分は売ってあげるよというぐらいな気持ちでやっていただきたいと思います。インターネット販売も最近はたくさんありますけれども、インターネット販売できない性格の産物もあります。

それからもう一つは、こういったオリジナル農産物を支援をしながら県の顔として出していく、大量生産、大量販売で出していくということも一つのこれからの農業のあり方だ

と思いますけれども、島根の農業をある程度支えてるのは産直市です。要するに、少量多品目でやってきた、百姓百品でやってきた、そういったものを、それぞれの道の駅とか産直市場だとかそういうところで販売をしているのが、今、島根の農業収入のかなりの割合を占めているはずです。そういったものも大切にしながら、高齢化の進んだ島根の農業を支えていく行き方の一つとして、少量多品目生産と、それから、いわゆる担い手がかかわれるようなこういったオリジナル商品をやっていくという、その2本立てで島根の農業を支えていくという行き方をぜひ大切にしていきたいなと思っております。以上です。

○委員 山口県の県境に住んでおまして、山口県がローソンと販売を結んでおります。ローソンの店頭で山口県は山口県の名産品を売っておると、もう大分前ですけど、そういう提携がありました。

それと、私、観光の仕事してるんですが、足立美術館に行ったとき、漬物のもとというのがあったんです。すごく安かったもんで、それをたくさん買って10人の方に配ったんですけど、すごく好評で、これどこで買ったのと言われたんで足立美術館で買ったって言ったんですけど、それで直接今度は私が、これまた買ってきてって言われたんですけど、すぐ足立美術館にも行けませんので、裏に生産者の方が書いてありました。そこで電話しましたら、今すごく時期的に漬物があれば、2週間ぐらいかかってもいいかと言われたんで、2週間たっても送ってくださいと言ってまた10個ほど注文したんですけどね、そういったことがありました。

あと、楽天さんあたりがすごく出しておられますが、島根も、その島根市場（しじょう）というんですか、市場（いちば）ですか、それをつくって、島根をこうして農産物どんなものでも買えるようなのを、もうインターネットで買えるようにしたらどうかと思っております。以上です。

○委員 私、ここでデラウェアということが書いてあるんですが、実は先回るときにシャインマスカットときぬむすめということで、私ちょっと、シャインマスカットをいい機会だったので今度買って、いただきました。非常においしかったです。ただ、一緒にインターネットで調べさせていただいたら、やはりシャインマスカットは全国、農業王国かなと思われる知名度の高い岡山とか長野だとかそういうところにつくっていて、多分、同時期に出すならば価格的には島根はいけるかなという価格でした。

そういうことも踏まえてみると、やはり島根県はデラウェアをあれだけ早く出荷できて、前回お話ししたんですが、お送りしたときに、今ごろブドウが食べれるのということで非

常に喜んでいただいた方が結構いらしたので、あれをあえてシャインマスカット一本やりということはないんじゃないかなというのが一つ私の意見です。

それと、有機農法にもつながるんですが、栽培者の名前が見える今はやりの写真も載せるというのは、顔と名前が見えるというのは非常に楽しいし安心感があるので、これも商工労働部と組んで市場・販路拡大につなげていったらいいんじゃないかなと思ってます。ぜひ今後こういうデラウェア、シャインマスカットなども、しまねブランドの一つとして定着していくのを望んでます。

あと、産直市もぜひ頑張って、温泉街などですとね、やっぱり地産地消、それからお客様が来られたときに地元の農産物、水産物を求めておられるということがあるので、少しでもいいから地元でとれたものが販売できるような組織といますか、情報を流す何かサポート的なことでも助言をしてあげられる、実際何かが起きるような方向にさせていただけるというか、知恵づけを提供していただけるといいかなと思っております。以上です。

○座長 最後、農林水産物の販路拡大について御意見いただきました。

これは皆さん大変期待されてることで、一つは市場外流通、その代表格として直売所、産直市、これが県内でも非常に台頭してきてると。恐らく直売所というのは、農業支援だけではなくて、農業者さんが今まで消費者さんと直接相対取引することがなかった、そういうコミュニケーションをとるような場としても機能してると。だから、農家さんの生きがい対策というか、そういう生活向上の面にも非常に繋がってるとして期待もされてますし、また、農業というのは食の安心・安全含めて非常に国民の意識も高まっている、それに応じて、直売所の市場規模というのはもう1兆円超してるというふうに言われてる、日本の唯一の成長市場ではないかと言われるぐらい期待されてる部門ですよ。

そうした中で、やはり島根県としてもいろいろ戦略を立てていく必要があると。特定の農産物、幾つかブランド化されているもの、これを地産地消を核にしながら売っていくということも皆さん好意的に受けとめられてますし、以上、特に価格交渉力ですね、これが生産者さんが持てるような政策支援というのに力を入れていただきたいというところでも一致した意見かと思えます。

では最後に、執行部の方から、以上の意見に対しまして御発言いただければと思います。

○ブランド推進課長 先ほどいろいろとお話伺っておりまして、ごもっともなことをたくさん聞かせていただきました。ただ、一つ、我々も農林水産部の方と一緒に動いておりますが、さっき出てました市場流通と市場外流通という、大きな昔ながらの仕組みというか、

そういったものの中で、より島根のものを県外に多く出していこうというところで、我々が今商工の目線でいろいろ動いているというのが実態です。

ただ、今年度、農林水産部が主導して今回出させていただいているようなこだわりのもの、これは今までにない動きだと思ってますので、こういったところを、きょうお話しいただいたような、一つは生産者の顔が見えるというか、こだわって売ろうとするような物の売り方とか、そういったところを工夫はやはり欠かせないだろうなと思った次第です。

県内向けには、当然のことながら、最近の流れとしてスーパーさんなんかにも地産地消コーナーみたいなものが結構ふえてきてますし、せんだって、これはJAさんがジョイントされたのかちょっと私はつきり押さえてないですが、マルマンさんかどっかで大々的に地産地消のコーナーをおつくりになって、そういう御協力をスーパーさんの方でもしていただくような動きも出始めてますので、言ってみれば地元の中で地元の品を支えるような動きをしっかりと後押しする必要があるのかなというふうに思ってますし、それと、地元でしっかりと地元の食材を使うというのは、先ほど委員さん、もともと旅館をやっておいでなので使っていたらと思うんですが、ふるさと料理店という制度をもって御協力をいただいているところです。

ただ、一つ、これ反省点としては、そういったお店がどこにどの程度あるのか、どういうお店がそういうお店なのかというPRそのものが若干弱かったような気もしてますので、しっかりそういったことも県外の方向けに目に見えるように、あわせて地元の方にも認知していただくような取り組みは今後やっていかないといけないかなというふうに思った次第です。

○農畜産振興課長 ちょっとかぶるとこもあるかもしれませんが、今、ブランド推進課長の方も言いましたが、市場流通、市場外流通について、先般もちょっと申し上げたと思いますが、今、契約的取引という言い方をしておりますけども、市場を通してでも、そういう卸さん、仲卸さん、あるいは小売さんの方へ価格提示をして、ある程度決まった価格で売っていくと。それは時期的なものもあります、いつからいつまではこれぐらいの価格でというような、細かいことを言えばいろんな設定の仕方があるんですけども、そういったこともうちの方とブランド推進課の方で一緒になって、仲卸さんなり小売さん、市場を通じたところでもそういった取引を今進めておまして、少しでも、先ほど委員さんの方からお話がありましたように、価格が自分たちの方から提示ができる、あるいは設定できるような取り組みを、やはり県内の農産物でもシェアを高めていきたいと考えておりま

す。

それから、委員さんから、ちょっとシャインマスカットとデラの話がございました。ちょっと説明が先般も悪かったのかもしれませんが、決してブドウをシャインマスカット一色にかえるという意味ではなくて、追加で出させていただいた資料でも、デラウェアというのは全国でも島根県は4位なり3位、生産量ではハウス栽培では3位というような、非常にある程度の位置を占めていると考えております。ただ、デラウェア自体が、最近消費者の嗜好が変わって大粒のブドウが好まれるというような状況になってきたものですから、そういったものも取り入れた形で、今農家の方へはデラウェアとシャインマスカットとの複合型の経営というようなことを指導をさせていただきまして、少しでもデラウェアだけの栽培からちょっと多様な栽培、品種構成ということを進めているところであります。決してデラウェアをなくすわけではございませんで、その点は大変先般の説明が悪かったこと申しわけありませんでしたが、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。

○座長 以上、農林水産部の3テーマについて御意見いただきました。

委員さん、執行部も含めて、追加で御発言いただきたいことがありましたらお願いしたいと思います。

○農林水産部長 本日は、お暑い中、貴重な御意見をいただきましてまことにありがとうございました。

個々の御意見に関しましては、ただいま各課長の方からお答え申し上げたとおりでございますけれども、最後に私の方から数点申し上げさせていただきたいと思ひます。

本日の御意見の中で、何と申しましても、農林水産業が産業として経済的に自立するものでなければならないという御意見をいただいたところでございます。この点に関しましてでございますけれども、やはり農林水産業を農林水産部がなぜ所管しているのか、社会福祉部局でもなくて、あるいは商工労働部局、産業担当部局でもなくて、なぜ農林水産部として所管しているのかというところに対して、まさに根源的な問いを突きつけられているようなものでございまして、この点は、私たち農林水産部の職員というのは常に自問自答を繰り返していかなければいけないところだと改めて思っておるところでございます。

その上で、なお島根県の農林水産業というものを考えました場合の地域的な条件、あるいは高齢化の進行している状況というものを考えました場合には、やはり、この資料にもございますけれども、暮らしと結びついた農林水産業あるいは農山漁村といったような視点というものが、どうしても考えなければいけない視点ではないかと思っております。

本日皆様に御議論いただきました担い手、有機農業、販路拡大、それぞれあるわけでございますけれども、担い手でありましたら、地域の担い手というのをいかにリクルートしていくか、新しく来ていただくかという点、そして有機農業でありましたら、どのように消費者の皆さんの理解を深めていくかという点、そして販路拡大、これは有機農業とも関連しておりますけれども、産直、あるいは地産地消、あるいは大消費地での流通、それぞれについてどのように効果的にPRをしてアピールをしていくのかという点、それぞれ非常に示唆に富んだ御意見をいただきましたので、今後の施策展開に、ぜひ検討に有効に使わせていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

○座長 ただいま部長から御発言いただきましたが、やはり農林水産部というのは産業的な側面だけではなくて生活全般にかかわる広い領域、根源的なことを地域含めて維持していくっていうことを考えていかざるを得ないテーマを抱えてると思います。

以上、前半は商工労働部、後半は農林水産部、2つのテーマで皆様方に広く御意見をちょうだいいたしました。

これでこの意見交換会は終了させていただきたいと思います。

委員の皆様方は、積極的に御発言いただきましてまことにありがとうございました。

本日出されました意見につきましては、10月に開催予定の改革推進会議に報告されて、来年度の県政策の予算編成の参考にさせていただくということでございますので、県の方で十分に今後検討していただきますようお願い申し上げます。

それでは、事務局の方にお返しいたします。

○事務局 活発な御意見ありがとうございました。きょうは農林・商工分野ということで大変示唆に富んだ御提言たくさんいただきまして、県の執行部としても大変参考になった思いであります。

これまで4日間、きょうは最後でしたけれども、4つの部会で本当にさまざまな意見をいただきまして、これ早速取りまとめまして知事にも報告をし、それから来月には県議会なり、それから改革推進会議の方にも報告をさせていただきたいと思います。その上で、来年度の予算編成、それから今後の長期的な施策のあり方ということについてどういうふうに反映していくか、このあたりはちょっと知事なり今の改革推進会議の方とも御相談をしながら皆さんの御意見を有効に使わせていただいて、また、その状況等についてもまた皆さんの方にフィードバックをしていきたいというふうに思っております。

今回、2回ということでもいい意見をいただきましたんですけども、一応これで一区切りなんですけど、さまざまな場でまたいろいろ御意見をいただくこともあるかと思っておりますので、またそのときにはよろしくお願いをしたいと思っております。

本日は大変ありがとうございました。